

メトロポリタン史学会 第三回総会・大会のお知らせ

来る4月21日(土)に、下記の要領でメトロポリタン史学会の第三回総会・大会を開催します。総会では今年度の活動報告と新年度の方針案の検討に加え、委員(2年任期)の改選を行います。また、大会では社会史を中心に現代歴史学の課題を考えるシンポジウムを行います。会員の皆さんの参加をお待ちしております。

日時 2007年4月21日(土)午前10時30分~午後5時30分

会場 首都大学東京(東京都立大学)91年館多目的ホール
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)

日程 総会:午前10時30分~12時

大会:午後1時~5時30分

シンポジウム「歴史学再考 社会史の現状をめぐって」(仮題)
〔報告者〕

保立道久氏(東京大学)「社会史研究から歴史知識学へ」

大澤正昭氏(上智大学)「唐宋時代社会史研究の現状と課題」

栗屋利江氏(東京外国語大学)

「“サバルタン・スタディーズ”と社会史の可能性:

植民地期インド史研究の動向から」

喜安 朗氏(日本女子大学名誉教授)

「戦後歴史学と社会史 網野善彦氏の業績を中心に」

懇親会:午後6時~(会費4,000円)

〔シンポジウムの趣旨〕

日本の歴史学界において社会史が大きな話題となり、フランスのアナール学派が広く知られはじめたのは、1970年代後半のことであるから、それから30年もの歳月が過ぎ去ったことになる。当初は日常琐事をあげつらうものにすぎないという断罪も繰り返されたが、徐々にマンタリテ(心性)やソシアビリテ(社会的結合)といった言葉が使われるようになって、社会史は歴史学のなかに確かな位置を獲得していった。しかし、その後も歴史学にたいしては政治文化論などの新たな提言が相次ぎ、さらに言語論的転回といった根源的批判が投げかけられると、社会史研究者を含め、歴史家は方法的論争のなかでしばしば守勢に立たされるようになった。こうした流れの延長上で、現在、多様な視角をとりこんだ通史的叙述が試み

られたりもするが、他方において、激変する社会への歴史学の訴えかけにはかつての力が備わっていないように思われる。それでも、グローバル化にともなうめくるめく変化をまえにして歴史学がただ佇んでいてよい道理はどこにもない。現状を切り開く知となるべく、むしろ新たに活力をみなぎらせて、たゆみなく可能性を探っていかなければならないはずである。

そこで、本シンポジウムにあっては、改めて社会史に着目し、その過去、現在、未来を確かめながら、歴史学という知を見つめ直してみようとする。そもそも歴史研究のあらゆる領域に社会史が根づいているわけではなく、たとえ根づいているとしても根づき方は様々であるから、そうした社会史の実情に注意を払いつつ手掛かりを見出して、歴史学再考を試みたいのである。今回は日本史、中国史、インド史、フランス史の専門家をお招きし、社会史そして歴史学について報告していただくが、ときには専門領域をこえた話が飛び出してくるだろう。そこに多彩な質疑が加わるならば、必ずや、「これまで社会史（歴史学）は何をなしてきたのか」、「いま社会史（歴史学）はどうなっているのか」、「これから社会史（歴史学）はいかにありうるのか」といった疑問をめぐって、示唆に富む何かが語られるに違いない。そのようにして歴史学のあり方を考えてみることに、これが本シンポジウムの狙いなのである。

メトロポリタン史学会第二回秋季シンポジウム報告

第2回秋のシンポジウム「いま社会主義を考える 歴史からの眼差し」では以下の報告と総合討論が行われました。

中嶋 毅氏（首都大学東京・東京都立大学）「社会主義ソ連における国家と社会の変容」

奥村 哲氏（首都大学東京・東京都立大学）「文化大革命から見る中国社会主義体制」

篠原 琢氏（東京外国語大学）「チェコ異論派の全体主義論と歴史認識」

栗原浩英氏（東京外国語大学）「ドイモイの20年：制度としての社会主義から理念としての社会主義へ」

平塚健太郎氏（東京都立大学大学院）「日本における初期社会主義」

和田春樹氏（東京大学名誉教授）「思想としての社会主義」

シンポジウムの内容は来春、桜井書店から『メトロポリタン史学叢書2』として刊行の予定です。ご期待ください。

【秋季シンポジウム参加記】

メトロポリタン史学 第2回秋季シンポジウム

「いま社会主義を考える - 歴史からの眼差し -」に参加して

釣井 史子(旧姓 横山)

去る2006年11月25日(土)に行われた上記シンポジウムに、「卒業以来初めて」参加させていただきました。私立高校の教員になって十有余年、日々の雑務と教材研究に追われ自分自身の勉強が不足していることを痛感していたところ、「行っておいで」と上司の快諾を得て、今回の参加となりました。土曜日も授

業があるため、なかなか研究室の企画にも参加できずにきましたが、今回シンポジウムでは有意義な報告をうかがうことができ、今後も出来る限り参加させていただこうと思いました。

私がシンポジウムに最も期待していたことは、今の高校生達に「社会主義、及び社会主義体制とはいかなるものであったのか」ということを、よりわかりやすく説明するために、新たな視点を得ることでした。シンポジウムの席上、報告を担当して下さった先生方からもありましたが、今春大学に入学する学生達は 1988 年～ 89 年に生まれた子供達です。今年度、私が担任をしている生徒達にあたりますが、彼らは物心がついたときには東欧社会主義体制が崩壊してしまっていた世代です。そんな彼らに限られた時間の中で、どんな言葉を使って話していけばいいのか、そのヒントをいただければと思ったのです。

シンポジウムは午前、午後の二部構成で、報告の中心は社会主義体制が敷かれたソ連、中国、チェコ、ヴェトナムの社会主義体制の成立期、及びその変遷と現在の状況等についてでした。これと合わせて、日本の初期社会主義についての報告があり、最後に総括として和田春樹先生のお話をうかがいました。個々の報告に対して、講評を申し上げられるほどの勉強は出来ていないため、そちらは出席なさっていた先生方にゆだねたいと思います。私としては、報告者の方々の最新の研究成果をうかがうことができたほか、歴史研究の最前線の有り様を講義で拝聴し、仲間同士でつたないながらも語り合った学生時代が思い出され、自分の原点に立ち返ることが出来た一日でした。また、最後の全体討論の際には、私が投げかけた素朴な質問にも丁寧に答えてくださったことに感謝しております。「1989 年に至るまで、そして 89 年当時の状況、さらにその後の各国状況」をご自分の体験もふまえて、今後の展望までお話しいただいたことは、生徒達に話をしていくうえでとても参考になりました。

シンポジウムと聞いて、敷居の高いものを想像しながらの参加でしたが、とても良い勉強をさせていただきました。ただ残念ながら、報告の内容に比べて参加者の人数が少々寂しいようにも思われました。せっかくの機会ですから、今後開催される第 3 回以降のシンポジウムには、多くの現役学生、及び卒業生諸氏にも参加して欲しいと一参加者として思いを強くしました。

【第一回歴史探訪参加記】

三度、安重根の書に会う

古谷 暢子

去る 10 月 8 日、穏やかな秋日和の中、メトロポリタン史学会の見学会で、世田谷区蘆花恒春園を訪ねました。100 年前の武蔵野の森がそのまま残る中にひっそり建つ徳富蘆花旧宅で、蘆花が韓国併合 3 年後の朝鮮旅行時に立ち寄った大連で入手した、朝鮮人安重根の書を、近代史家趙景達氏の解説で間近に見ることができました。趙氏は、蘆花が伊藤博文狙撃犯の書を大切に保存していたことについて、朝鮮民族愛国の志士の精神に共感をしたからという中野好夫氏の説を紹介してくれました。「貧而無諛、富而無驕」という『論語』子貢の言葉を書いた安重根の筆跡は、達筆ではないが丁寧に書かれ、誠実さが感じられるものでした。

安重根といえ、朝鮮史上愛国の義士として有名で、その直筆を 100 年後こんな閑静な場所でしかも至近距離で見ることができ感激しました。私たち朝鮮史を勉強する者に安重根の書はお馴染みのものです。嘗て、京橋に韓国からの輸入書籍を扱っていた三中堂という本屋があり、本を買う度に安重根の署名の入った「一日不讀書則口中生棘」というしおりをつけてくれたのです。学生時代、机の上や本の間からこの

しおりが出てくると、胸がちくりと痛むと同時に、「よけいなお世話」と思ったものです。これが、安重根の書に出会った一度目です。

そして、韓国を二回目に訪ねた時、ソウル中心部南山（朝鮮時代に烽燧，植民地時代に朝鮮神宮が設置された）の安重根義士記念館に行き、栞の現物を始め多数の安重根の書を見たのが二度目です。愛国の英雄の記念館は厳肅な雰囲気漂っているかと思いきや、夏休み最後という時期もあったのか、宿題のためにやってきたらしい小学生をつれたオンマ（母親）の姿が狭い館内のあちこちに見られ、オンマの説明の声や子どもの声で結構賑やかでした。壁にレポート用紙を押し付けて説明書きを書き写したり、舞台のようにしつらえた台の上に子どもを座らせて休ませていたり、博物館などでの韓国人の気楽さを初めて実感しました。

さて、話を元に戻すと、蘆花旧宅を後にして、京王井の頭線で駒場東大前、日本民藝館に移動。ここも、何度か訪ねていますが、芹沢銈介収集の李朝民画が展示されており、素朴なちょっと変わった味を出したもので、発見のある楽しい一日でした。

【歴史随想】

『淀殿 - われ太閤の妻となりて』の刊行によせて - 評伝の楽しみ -

福田 千鶴（首都大学東京・都立大学、日本近世史）

本年一月に、ミネルヴァ書房より拙著『淀殿』（ミネルヴァ日本評伝選）を出版することができました。これは一般に豊臣秀吉の側室として有名な「淀殿」あるいは「淀君」と称される女性の評伝です。ただし、拙著でも指摘したことで、彼女の生存中に「淀殿」や「淀君」などと呼ばれたことはありませんので、今後は学術的には彼女の本名である浅井茶々、あるいは号の「淀（よど）」を用いていく必要があると思いますし、愛称としてならば「淀さん」を用いていってはどうかと考えています。

さて、『淀殿』は私にとって5冊目の単著となりますが、人物伝としては吉川弘文館から継続して出版されている評伝シリーズの「人物叢書」の一つ『酒井忠清』（2000年）につぐものとなります。「人物叢書」は日本史の伝記シリーズとして定評があるもので、『酒井忠清』はその通巻225号として刊行してもらいました。一方、今回のミネルヴァ書房から出されている「日本評伝選」は、2003年9月から刊行されはじめたもので、毎月1冊から2冊が継続的に刊行されていますが、まだ歴史は浅く、『淀殿』はその44冊目にあたります。

「人物叢書」の刊行のことばには、「『歴史を動かすものは人間である。個人の伝記が明らかにされないで、歴史の叙述は完全でありえない』という信念のもとに、専門学者に執筆を依頼し、日本歴史学会が編集し、吉川弘文館が刊行した一大伝記集である」とあります。こうした趣旨のもと、「人物叢書」では当該人物の経歴については網羅的・悉皆的に書くことを重視した編集方針をとっていました。

「日本評伝選」の刊行のことばにも、「歴史を動かすものは人間であり、興味に富んだ人間の動きを通じて、世の移り変わりを考えるのは、歴史に接する醍醐味である」と同様の趣旨が述べられていますが、さらに「単に経歴の羅列にとどまらず、歴史を動かしてきたすぐれた個性をいきいきとよみがえらせたい」とあります。ここに象徴されているように、「日本評伝選」は「人物叢書」との違いを鮮明にするために、歴史の中の人間の姿を再発見していくところに重きを置いた問題提起的な評伝であることを強く意図したシリーズであるといえます。

このように「評伝」という同じジャンルでありながら、シリーズによって編集方針の違いがあり、その結果として私が書いた二つの評伝の叙述のしかたにも大きな違いが出ることになりました。

『酒井忠清』は、評伝の決定番として辞書的な役割を担う内容であると自負していますが、読み物としての興味にはやや欠けるところがあったかもしれません。それでも、下馬將軍とあだ名された酒井忠清の初めての本格的評伝として、毎日新聞と読売新聞の書評欄に取り上げてもらうことができました。

これに対して、今回の『淀殿』については、経歴などについてはまだまだ十分に明らかになっていない点や課題を残す点などもあります。一人の人間としての「淀殿」がどのような個性を發揮しながら歴史の中に存在していたのか、という視点からその人物像に迫ることで、茶々の呼び名に関する疑問に始まって、茶々の居場所の確定（淀在城が一年に満たないという事実）、一夫多妻制の成立など、いくつか大きな問題提起ができたのではないかと思いますし、読み物としてもそれなりに面白い内容になったのではないかと思います。書評としても、すでに日本経済新聞と産経新聞で取り上げてもらい、井上章一氏からは「目からウロコの戦国女性史」と評していただきました。

ただ、いずれの叙述の仕方であろうとも、私は評伝を書くことをとても楽しむことができたというのが実感です。『酒井忠清』を書き終えたときも評伝は楽しいと感じたのですが、今回の『淀殿』でも同じ思いであり、叙述の仕方は異なっても、ある一人の人物を通してその時代を考えることには共通する充実感がありました。これまでに出版した他の3つの著作（『幕藩制的秩序と御家騒動』、中公新書『御家騒動』、『江戸時代の武家社会』）も私のかわいい「こどもたち」には違いないのですが、産むときの苦しさといったら『酒井忠清』と『淀殿』の比較にならなかったといつてよいでしょう。

こんなことを正直に吐露すると、私の歴史研究者としての資質を疑われてしまいそうですが、欧米では「評伝全盛期」であるということを知ったこともありますので、日本史でも歴史研究の主要なジャンルとしてももう少し評伝に重きをおいてもよいのではないかと考えています。

最後に今後の課題ですが、今年は卒業論文以来のテーマである「御家騒動」に立ち戻って、私が歴史学研究をはじめた原点について三度目のみつめなおしをしてみたい、と目標をたてています。次回作に予定されている評伝『春日局』に取り組むのは、まだまだ先のことになりそうです。

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
論文（図表を含み、24,000字以内；英文の場合は、8,000語以内）
研究ノート・史料紹介（同 12,000字以内；英文の場合は4,000語以内）

学界動向（8,000字以内；英文の場合は2,700語以内）

時評・提言（4,000字以内）

- (5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨800字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3部、フロッピーディスク及び別記送り状*（1部）を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース（歴史・考古学分野） 河原 研究室 気付

『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119（河原研究室） Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp（河原温研究室内）

SNC47077@nifty.com（河原温）

* 送り状は学会ホームページ（<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>）からダウンロードしてご使用下さい。

訃 報

次の会員の方がご逝去されました。謹んでお知らせするとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

日高 稔 氏

2006年8月21日

肺 癌

【事務局からのお願い】

年度末になりました。総会に向けて会計決算の作業中ですが、会費未納が目立ちます。一人でも多くの会員が会費を年度内にお支払い下さるようお願いいたします。納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい。一般5,000円、学生・院生3,000円です。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒192-0397

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

: 0426-77-2110（木村誠研究室）

E-mail: mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287